

行	名称	ふりがな	解説
た	耐久性	たいきゅうせい	コンクリートが使用に耐えられる年月によって定められるコンクリートの性質。コンクリートが種々の物理的および化学的作用によって、腐食または破壊される程度で定まる。
	打設	だせつ	打ち込み*と同義語。RC示方書では「打ち込み」を用いている。
	単位水量	たんいすいりょう	表乾状態にある骨材を用いて、コンクリート1m ³ をつくるときに使用する水の重量。
	単位セメント量	たんいせめんとりょう	コンクリート1m ³ をつくるときに必要なセメントの重量。
	短期強度	たんききょうど	とくに材令初期の硬化の過程にあるコンクリート強度のこと。初期強度、早期強度ともいう。コンクリート強度は材令の経過に従って増大する。 →長期強度*
	炭酸塩	たんさんえん	炭酸(H ₂ CO ₃)の塩で、炭酸イオン(CO ₃ ²⁻)をふくむイオン結晶物質。正塩(MI ₂ CO ₃)、水素塩(MIHCO ₃)と水酸化物塩(MI ₂ CO ₃ ・nMIOH)とがある。
	断熱温度上昇	だんねつおんどじょうしょう	マスコンクリート*と同様な状態で養生*するため、コンクリートがもっている熱量を極力外へ放熱しないように供試体*を断熱的に包んだ場合の温度上昇。単位セメント量*が220kgのコンクリートでは、普通ポルトランドセメント*で33～42℃、低発熱セメント*ので25～30℃程度の断熱温度上昇がある。
ち	中庸熱ポルトランドセメント	ちゅうようねつぽるとらんどせめんと	水和熱の低いポルトランドセメント。ダム、橋梁、巨大構造物などに用いるマスコンクリート*では、水和熱による内部温度の上昇が温度応力によるひび割れ発生の原因となるので中庸熱ポルトランドセメントが使用される。セメントが水和する際に発生する水和熱を小さくするため、発熱量が多いエーライト*とアルミネート相*を極力減らし、長期強度*の発現をつかさどるビーライト*を増やしたもので、含有量はビーライトが35～42%、エーライトが36～40%、アルミネート相が4～7%程度である。普通ポルトランドセメント*に比べて短期強度*は低い、長期強度は同程度で乾燥収縮*が小さく、耐硫酸性や化学抵抗性が大きいなどの優れた特性をもっている。また、普通ポルトランドセメントに比べて、混和剤の吸着量が少ないため、流動性が向上する。
	長期強度	ちょうききょうど	コンクリート強度は一般に材令28日のものが基準とされるが、長期強度は材令のうち、3ヵ月、6ヵ月、1年あるいはそれ以上のコンクリート強度をいう。短期強度*の対比語。

て	低発熱セメント	ていはつねつせめんと	水和硬化の際に、発熱量が小さいポルトランドセメントのこと。エーライト*を少なくし、ビーライト*を多くしたものである。混合セメント*として発熱量を小さくしたものもある。ダム工事のような大量施工では発熱量が大きいと温度上昇が激しいので、低発熱セメントが使用される。
	鉄率	てつりつ	Fe ₂ O ₃ に対するAl ₂ O ₃ の割合。鉄率が大きいとAl ₂ O ₃ 分が多くなるので、クリンカー中のアルミネート相*の生成量が多くなり、短期強度*が高く水和熱の大きな化学抵抗性の小さいセメントができる。逆に、鉄率が小さいとFe ₂ O ₃ 分が多くなるので、アルミネート相が少なく、フェライト相*が多くなり、短期強度は低く水和熱の小さな化学抵抗性の大きいセメントが得られる。IM(Iron Modulus)ともいう。
	電荷	でんか	すべての電気現象の根元となる実体。その性質は、電気量によって規定される。電荷という言葉は電気量の意味に用いることもある。電気ともいい、閉じた系の電気量の代数和は不変である(電荷保存則)。 →イオン電荷*
	電子顕微鏡	でんしけんびきょう	電子線を用いて試料の拡大像を得る装置。この中には試料を透過した電子を、電子レンズを用いて結像する透過型、試料表面で反射した電子を結像する反射型、集束電子線を試料表面上に走査して各走査点からの2次電子を用いて像を作る走査電子顕微鏡*、加熱あるいはイオン照射によって試料から放出される電子を結像する表面放出型(電界イオン顕微鏡)などがある。
	電子分光法	でんしぶんこうほう	物質に光やX線のような電磁波、電子やイオンのような荷電子粒子や励起電子をあて、発生する電子の運動量分布、運動量分布、運動エネルギー分布、その角度分布などを測定して物質の物理状態を調べる方法の総称。励起光照射源により異なった情報が得られるので、入射線の種類に応じた名称でよぶことが多い。原子や分子の電子状態や振動状態、とくに内殻電子のエネルギー状態や電荷分布、固体内電子のふるまい、固体表面や吸着分子の状態について多様な知識が得られる。また、電子検出感度を高めることにより、微量試料の検出も可能なため、分析分野をはじめ、有機化学、生化学などの微量試料を扱う分野での検出、同定、構造解析などにも応用される。1960年代当初、これらの化学的研究に、X線を照射源としたX線光電子分光法が用いられ、とくにESCA(Electron Spectroscopy for Chemical Analysis)と呼ばれた。現在でもこの名を使うことがある。
と	トバモライト	とばもらいと	スコットランドのトバモリーで発見された天然鉱物。組成は5CaO・6SiO ₂ ・5H ₂ Oで示される珪酸カルシウム水和物の一種。トバモライトは組成がC-S-H*に類似しており研究の参考にされている。
	トランジション・ゾーン	とらんじっしょん・ぞーん	＝遷移帯*の英語表記
	トリディマイト	とりでいまいと	珪酸鉱物の一種。鱗珪石ともいう。化学組成は「SiO ₂ 」。高温型、中間型、低温型の3種が知られており、それぞれの間の転移温度(常圧)は163℃と117℃である。